

坂口安吾「桜の森の満開の下」：理性の限界に関する文脈

河内，重雄
北九州市立大学文学部：准教授

<https://doi.org/10.15017/2544327>

出版情報：語文研究. 125, pp.1-14, 2018-06-09. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

坂口安吾「桜の森の満開の下」論

— 理性の限界に関する文脈 —

河 内 重 雄

一 本稿の狙い

坂口安吾「桜の森の満開の下」〔『肉体』昭和二十二年六月）は「山賊」の男を主人公とする、三人称の小説である。作品梗概は以下の通り。

江戸時代以前の大昔、鈴鹿峠に一人の山賊が住んでいた。ずいぶんむごい男だったが、桜の森の花の下だけは怖ろしく、気が変になってしまう。そのことについて、毎年考えようと思うが、考えられないまま十数年が過ぎてしまう。そういう間、考えている間に女房も八人になる。八人目の女房は美し過ぎる女で、最も醜い「ピッコの女」を除く他の六人の女房を山賊に殺させる。女は櫛や簪、着物などを大事にし、それらによつ

て一つの美が成り立つ様に山賊は目をみはる。女の話やそれら装飾品から、山賊は女と共に都に行こうと思う。都に行く前に、山賊は満開の桜の森に行くが、花の下の怖ろしさに男は逃げ出してしまふ。

男と女とピッコの女は都で暮らすようになる。都で女は装飾品よりも住人の首を欲しがり、男は女に命じられるままに首をとつてくる。その首で女は架空の物語を作り興じる。首が醜くなるほど女は喜び、首遊びへの女の欲望にきりが無いことに男は退屈してしまふ。男が山に帰る決心をしたため、女はすぐに帰ってくるからとピッコの女を都に残し、男について山に行くことにする。女を背負って満開の桜の下に踏み込んだ時、男は女が鬼であることに気付く。男は必死に鬼の首を絞め、気が付くと女はすでに息絶えている。男は呼吸も

力も思念も、全てが同時に止まってしまふ。男が我に返ると、やはり桜の森の満開の下にはひっそりとした無限の虚空が満ちている。女の顔の花びらをとろうと男が手を伸ばすと、女の姿はなく、男の身体も消えてしまつていた。梗概は以上である。

坂口安吾「桜の森の満開の下」(以下、本作とする)は、小説の最初と最後に共通するものがある。以下は本作の最初の方の一節である。

さうなつて何年かあとに、この山に一人の山賊が住みはじめましたが、この山賊はずいぶんむごたらしい男で、街道へでて情容赦なく着物をはぎ人の命も断ちましたが、こんな男でも桜の森の花の下へくるとやつぱり怖しくなつて気が変になりました。そこで山賊はそれ以来花がきらひで、花といふものは怖しいものだな、なんだか厭なものだ、さういふ風に腹の中では呟いてゐました。花の下では風がないのにゴウ／＼風が鳴つてゐるやうな気がしました。そのくせ風がちつともなく、一つも物音がありません。自分の姿と登音ばかりで、それがひっそり冷めたいそして動かない風の中につつまれてゐました。花びらがぼそ／＼散るやうに魂が散つていのちがだん／＼

衰へて行くやうに思はれます。(略)

けれども山賊は落付いた男で、後悔といふことを知らない男ですから、これはをかしいと考へたのです。ひとつ、来年、考へてやらう。さう思ひました。(略) 毎年さう考へて、もう十何年もたち、今年も亦、来年になつたら考へてやらうと思つて、又、年が暮れてしまひました。

満開の桜の森の下について、男は十何年もの間「をかしい」と思つている。つまり、男はまだ答への出でない問題を抱え続けている訳だ。本作の最後には、「桜の森の満開の下の秘密は誰にも今も分りません。」とある。誰にも分らない「秘密」というのは、「をかしい」を言い換えたものと解してよいだろう。だとすると、本作は最初と最後に未解決の問題を配していることになる。「秘密」が本作の大柱なのだ。

本作は、分かり得ぬ何か、不可知の事柄についての小説と言える。分かり得ないということにこだわつて、分かり得ぬものは分かり得ぬものとして、作品全体を解釈するというのが本稿の狙いである。

二 女の美及び首遊びについて

山賊の男によると、桜の森の満開の下と美しい女は似ているという。

(略)とびたつやうな怖ろしさがこみあげ、ぎよツとして振向くと、女はそこにいくらかやる瀬ない風情でた、ずんでゐます。男は悪夢からさめたやうな気がしました。そして、目も魂も自然に女の美しさに吸ひよせられて動かなくなつてしまひました。(略)

なんだか、似てゐるやうだな、と彼は思ひました。似たことが、いつか、あつた、それは、と彼は考へました。ア、さうだ、あれだ。気がつく^とと彼はびつくりしました。

桜の森の満開の下です。あの下を通る時に似てゐました。どこが、何が、どんな風に似てゐるのだから分りません。けれども、何か、似てゐることは、たしかでした。

「似てゐる」ということは、何かが決定的に異なつてゐるということの意味している。本章では女の美と首遊びについて

考えてみたい。

まずは女の美について。以下は本作の一節である。

女は櫛だの笄だの簪だの紅だのを大事にしました。(略)まるで着物が女のいのちであるやうに、そしてそれをまもることが自分のつとめであるやうに、身の廻りを清潔にさせ、家の手入れを命じます。その着物は一枚の小袖と細紐だけでは事足りず、何枚かの着物といくつもの紐と、そしてその紐は妙な形にむすばれ不必要に垂れ流されて、色々の飾り物をつけたすことによつて一つの姿が完成されて行くのでした。(略)かくして一つの美が成りたち、その美に彼が満たされてゐる、それは疑る余地がない、個としては意味をもたない不完全かつ不可解な断片が集まることによつて一つの物を完成する、その物を分解すれば無意味なる断片に帰する、それを彼は彼らしく一つの妙なる魔術として納得させられたのでした。

一つ一つでは意味をもたない断片により「一つの美」が完成する。そして、先行研究ではあまり注目されてこなかったが、その完成したものを分解すれば、また無意味な断片に戻つてしまふ。つまり女の美は可逆的なものであり、一回一回完

成形があり、まだ完成していない状態と明確に区別され得るものなのである。断片としての桜の花びらが降りそそぐことに完成がないのとは違うと言えよう。

やっていることに美か醜かの違いはあるが、女の首遊びも同様である。(注2)

女は毎日首遊びをしました。首は家来をつれて散歩にです。首の家族へ別の首の家族が遊びに来ます。首が恋をします。女の首が男の首をふり、又、男の首が女の首をすて、女の首を泣かせることもありました。(略)

坊主の首もありました。坊主の首は女に憎がられておきました。いつも悪い役をふられ、憎まれて、なぶ鬻り殺しにされたり、役人に処刑されたりしました。坊主の首は首になつて後に却つて毛が生え、やがてその毛もぬけてくさりはて、白骨になりました。白骨になると、女は別の坊主の首を持つてくるやうに命じました。

胴体から切り離された首それ自体は、櫛などと同じく、一つ一つでは何の意味ももたない。断片としての首は物語の中で何らかの役割を果たし、物語はその一つ一つが完結したものである。一つの坊主の首が、ある物語では「鬻り殺しにさ

れ」、別の物語では「役人に処刑され」ている。首遊びも可逆的なもので、一つの完成した物語を「分解」すれば、また無意味な断片に戻ってしまうのだ。

本作には「女の欲望にキリがない」という一節がある。終わるといことがない、際限がないという点で、無数の花びらの散る桜の森の満開の下と、女の美及び首遊びは確かに「似てゐる」。が、完成した状態と未完成の状態の区別がつかつかないかという点で、両者は異なっている。女に終わりが無いのは、美や首遊びは完成してしまうと飽きてしまい、飽きたら分解してまた別の完成を求め続けることになるからに他ならない。同じように終わりが無いと言っても、降りしきる花びらに完成のない桜の森の満開の下とは異質なのである。

三 桜の森の満開の下について

山賊の男が怖れるのは、タイトルにもある「桜の森の満開の下」である。以下は本作の一節。

(略) まさしく一面の満開でした。風に吹かれた花びらがバラ／＼と落ちてゐます。土肌の上は一面に花びらがしかれてゐました。この花びらはどこから落ちてきたのだ

らう？ なぜなら、花びらの一ひらが落ちたとも思はれぬ満開の花のふさが見はるかす頭上にひろがつてゐるからでした。

桜の森の下には風で花びらが落ち続けている。先にちらと述べたように、断片としての花びらは終わりなく落ち続け、完結することがない。本作の桜の下には風が常に張りつめている。風の描写は際限なく落ちる花びらと関係していよう。

加えて、桜の森の下について、本作には次のような一節も見られる。

〔略〕花の下にさしかゝる時はまだそれほどはありませぬ。それで思ひきつて花の下へ歩いてみます。だんく歩くうちに気が変になり、前も後も右も左も、どつちを見ても上にかぶさる花ばかり、森のまんなか近づくと怖しさに盲滅法たまらなくなるのです。

男が怖れるのは花の下であって、そこに行くまではそれほど怖ろしくはないという。つまり、満開の桜の森と、その「下」という位置が問題なのだ。本作には、「山から都が一目に見えます。なんといふたくさんの家だらう、そして、なん

といふ汚い眺めだらう、と思ひました。」といった一節がある。山の上から無数の家々を見ている訳だが、例えば桜の森も遠くから眺めれば、一つの桜の森という全体として、一つの景色として成立する。が、桜の森の満開の下では、「前も後も右も左も」視界全体に桜の花びらが降り積もり続け、一つの完結した景色として把握することができない。要は、女のみや首遊びと違い、桜の森の下の光景は、人の構想力では一つの完成した景色として捉えることができないものなのである。

熊野純彦『カント 世界の限界を経験することは可能か』^(注3)は、「崇高なもの」(怖ろしいもの)と「美」とを次のように區別している。

かたちを超えて莫大なもの、かたちを否定しつつづけてゆく力のあらわれは、「無限定なもの」をしめす(略)。前者は自然における巨大なものであり、後者は自然にあって強力な現象にほかならない。カントは、それぞれを「数学的に崇高なもの」「力学的に崇高なもの」と呼ぶ(略)。いずれにしても、無限定なもの⁽¹⁾をまえにして、ひとは崇高さ、気高さをおぼえるのである。

崇高なものを、もういちど美との対比で考えてみる。(略) 美はかたちに宿る。美しいもののかたちを辿るとき、構想力はうらぎられることがない。なだらかな稜線を目でかたどるとき、ひとの構想力は、それまで目を愉しませてきた柔らかな曲線のイメージをなお現在にとどめ、いつでもつぎにあらわれる柔和な線のつらなりを予測している。美しいものの判断にあつて、構想力はかたちのさだまったものに同調しながら、不意うちされることのない形式のうちで自由に戯れている。

崇高なものは、これにたいして、かたちのない対象においても見いだされる。(略) 見たすこともできないほどに、どこまでもつらなる山々は、そのかたちをただちにとらえることができな。さかまく海は、波頭がかたちをとつたかと思ふと、すぐさま崩れ、崩れてはまたかたちをむすんでゆく。かたちの一瞬の生成と崩壊がくりかえされることこそが、嵐の海原がとる、かたちなきかたちであり、形式をたえず否定してゆく形式にほかならない。そこでは構想力が不断にうらぎられ、一瞬さきの予測もつかない。つきつきと生まれては消えてゆくかたちは、構想力の不意をつき、「構想力にとつては暴力的なものとしてあらわれる」(略)のである。

(略) 崇高なもののままで構想力は真摯となる。崇高なもののは構想力の能力を凌駕しており、構想力をうらぎ置きざりにしてしまおうとするものであるからだ。巨大な、あるいは強大なものをまえにして、構想力はかたちを超えてゆくかたちをとらえようと懸命になり、かたちを破壊するかたちを掴もうとして真摯となるのである。

構想力がこのころみに挫折するとき、崇高なもの立ちあらわれる。崇高なものが現前するその瞬間、構想力は賛嘆の念をいただき、厳肅さにとらわれることになる。そこには、構想力にとつて〈不可能なもの〉が顕われているからだ。構想力にとつて不可能なことは、「総括」の無限な継続であり、したがつて無限なものを全体として総括することである。構想力にとつての不可能性のかたに、不可能性それ自体がかいまみられる。

(以上「第三章」)

引用文中には、崇高なものが現前する時、人は「厳肅さにとらわれる」と述べられている。以下、本書については『カント』と略記するが、『カント』には、崇高なものは時に「恐怖」を与えるともある。全体を秩序付けてまとめあげる力、つまりは構想力を裏切らないものは美として見ることができ

る。それに対し、構想力を凌駕するものは崇高なものに見える、とまとめられよう。

カントは三つの認識の基準「真・善・美」について原理的に考察しようとした。美の対義語は醜である。本作の女の装飾品等の様々な組み合わせは美、首遊びは醜と考えられる。重要なのは、美の基準でもってある対象を見ようとし、構想力が挫折する時、その対象は美や醜ではなく崇高なもの、怖ろしいものとして見える、ということだ。「カント」では特に述べられていないが、美と崇高なものとは、認識の仕方という点では同じと言えよう。

構想力について考える場合、対象を見る立ち位置も視野に入れる必要がある。以下は『カント』からの引用である。

(略) 自然のうちには、過剰な大きさによってかたちを否定してゆくもの、形式を破壊する強力さにおいて、いっさいのかたちそのものを超越するものがある。それは法外なもの、構想力にとって圧倒的に「法外なもの」にほかならない。自然がときに示すこの法外さ、その到達不可能性が、呈示不可能な理念の「呈示」となる。それは呈示されないものの呈示、現前することを否定すること自体による現前化であり、不可視のものを、不可能性と

の境界において呈示することなのであった。

ところでしかし、不可能性との境界とはなんだろうか。(略) ピラミッドと富士の例にもういちど立ちかえってみる。

ある巨大な対象について、それが「崇高なもの」であるという思いをいだくためには、適正な隔たりが必要であった。近づきすぎれば部分しか目に入らず、したがって全体の大きさは逃れさり、あまりに遠ざかれば、全体そのものがちいさく見えて、部分を総合してゆく困難がそもそも生じない。巨大な対象について、構想力による把握と総括がなお可能であるのなら、ひとは対象にもつと近づかなければならない。全体を総合することが端的に不可能なのは、対象にひどく近づきすぎた場合である。その場合ひとは、対象から距離をとりなおす必要がある。適正な距離とは、そのばあい、ひどく微妙な一点においてなりたつことになるだろう。——そうであるとするれば、「端的に大きなもの」としての「崇高なもの」(数学的に崇高なもの)は、厳密にいえば、「把握」と「総括」という構想力のはたらきがなお可能である大きさと、そのはたらきがもはや端的に不可能となってしまうような大きさのあいだに生起する、ぎりぎりの境界において

感じとられていくことになる。

〔第三章〕

富士山を遠くから眺める時、全体を一つに総合して見ることができる。この場合、構想力が十分に働いているため、人は美しいと感じる。だが、富士山に近付いて行き、構想力を超えるか否かの境界線上（「ひどく微妙な一点」）に立つ時、富士山は崇高なもの、認識を超える怖ろしいものに見えるであろう。それは「不可視のもの」が「不可能性との境界において呈示」されるような位置である。桜の森についても同様だ。遠くから眺める分には構想力が裏切られることはない。その場合「絶景」と見えよう。しかし、森に近付き、満開の桜の森の下に入り込むとどうか。無秩序に視界に入っては消えていく無数の花びら・断片は、人間の構想力には余るものと言える。桜の下は怖ろしい光景とうつると考えられる。

可逆的で一回一回全体として完成する女の美や首遊びは、きりがないために、うんざりはするであろうが、構想力が裏切られることはない。桜の森の下は、花びらが四方八方際限なく降り続けるため、全体としてまとめあげ、完結させることができない。美的基準で見ようとする限り、構想力は打ちのめされることになる。『カント』では崇高なものについて、次のように述べられている。

自然の全体（時間的・空間的な世界の果てと同義——河内注）は、経験にたいして与えられない。全体が境界で区切られていることを要求するとすれば、（第一章で確認しておいたように）世界の境界は経験のそのつど生起するものであるにすぎないからである。境界がそのたびに設定されるとすれば、究極の境界（世界の果て——河内注）は不可視であり現前しえないということだ。自然の対象のうちには、自然のそうした際限のなさを表出するような、大きさにおいて、あるいは力について圧倒的に法外なもの、すくなくとも「構想力にとって法外なもの」（略）が存在する。それは自然そのものの「到達不可能性」を想わせる。——自然のこの到達不可能性が、理念の「呈示」となる。ただし、理念がほんとうは呈示不可能なもの、直観にたいしてはけつして現前しないものであるかぎりでは、それは呈示されないものの呈示、呈示することの不可能性による呈示となるだろう。（略）

感覚にたいしてけつして与えられることのないもの、見えないもの、「超感性的なもの」は、構想力が到達しようものの（かなた）にある「法外なもの」である。法外なものとして「崇高なもの」は、構想力にとっては一箇の「深淵」となる。それを覗きこむことを一方では恐れ、

他方ではそれに魅入られないではいられない深淵となるのである（略）。
（第三章）

人間の構想力を超える崇高なものを経験は、世界の果ての経験、世界の始まりといった「究極の境界」の経験に通ずる側面がある。人が立つことのできないはずの境界線上の経験、不可知の領域と接する境界線上の経験と言い換えてもよいであろう。桜の森の下は、構想力の限界、認識・理性の限界が問われる場なのである。

四 小説「白痴」との関係

本作の最後の方には次のような一節がある。

桜の森の満開の下の秘密は誰にも今も分りません。あるひは「孤独」といふものであつたかも知れません。なぜなら、男はもはや孤独を怖れる必要がなかつたのです。彼自らが孤独自体でありました。

彼は始めて四方を見廻しました。頭上に花がありました。その下にひつそりと無限の虚空がみちてゐました。ひそひそと花が降ります。それだけのことです。外には

何の秘密もないのでした。

桜の森の下の「秘密」とは「孤独」かもしれない、とある。孤独のカギカッコが強調か引用かは不明だが、なぜここで孤独という語が出てくるのか。

周知のように、孤独はこの時期の坂口安吾の作品におけるキーワードの一つである。同じく孤独という語の出でくる作品に「白痴」（『新潮』昭和二十二年六月）がある。本作と「白痴」とのつながりについて、高山京子「白痴」と「桜の森の満開の下」——坂口安吾私観 その3^{注4}は次のように述べている。

「白痴」は昭和二十一年六月号の「新潮」に、そして「桜の森の満開の下」はその一年後、「肉体」に発表された。『坂口安吾全集』別巻所収の七北数人による年譜を見れば、当初、「桜の」は、「白痴」に続く作品として「新潮」の編集長・斎藤十一に渡された。

筆者は以前、「白痴」について拙文をものしたことがある。^{注5}「白痴」には「気の違ひさうな孤独^{注6}」といった言葉の他に、「絶対の孤独」や「芋虫の孤独」といった言葉が出てくる。拙稿ではこれらの言葉について、長谷川宏『ことばへの道』^{注7}を参

照しつつ考えた。

長谷川氏によると、私たちは言葉があるから自身を他人や世界と関係あるものとして感じることができると。そのため、言葉に関する何らかの危機が生じると、他人や世界とのつながりが失われてしまうことへの恐怖を抱くことになる。この、他人や他人の住まう世界が自分とは何の関わりもないものになることへの恐怖が、「絶対の孤独」＝「気の違ひさうな孤独」と考えられる。それに対し、「白痴」の女の「芋虫の孤独」とは、他人や世界との関わりが完全に切れてしまっている状態のことだ。小説「白痴」において、「白痴」の女は、私たちが日常使っている言葉の共同性(注)に参加しきれていない存在とされている。彼女は伊沢と違い、暗い押入れの中で傍にいる伊沢の存在を「忘れ果て」てしまっている。言葉が機能しておらず、故に世界から切り離された状態と言える。先回りして言えば、本作における「孤独」はこの「白痴」の女の「芋虫の孤独」に近いと思われる。

前述のように、崇高なものの経験とは、人の構想力・認識を超えるものの経験である。それは世界の果ての経験に重なるところがある。認識を超えるものについて、『カント』には次のような一節が見られる。

(略)物自体とは一般に、認識し経験するもの(主観)から独立に、それ自身に固有なありかたをしている対象(客観)のすがたをさす。(略)カントによれば、経験と認識はかならずそれを可能とする枠組みのなかで生起する。逆にいえば、それ自体として考察された(もの)、つまり「物自体」については、そのような枠組みはあてはまらないことになる。これが「物自体は認識されない」とカントが語る場合の、基本的な意味にほかならない。これにたいして、経験と認識がその内部で可能となる枠組みをかいして主観に与えられた(もの)が現象であり、それだけが認識可能であることになるだろう。

(略)私にとって可能な経験、私が経験することができものはすべて、空間と時間という枠組みのなかで現に可能となっている。対象が、あるいは対象の全体としての世界が、そうした枠組みをはなれてどのようにあるのか、自体としてはどのように存在しているのかを、経験する主観は認識することができない。

(略)空間と時間は、経験されるかぎりでの現象がそのうちで可能となる条件なのだから、現象のいっさいを欠いた空虚な空間そのもの、空虚な時間そのものの経験はあ

りえない。どのような現象もうちに含んでいないような空間・時間の経験があるとすれば、それはうつろな経験であり、うつろな経験はしかし経験ではない。「世界の果て」の経験がありうるとすれば、その経験は、世界の内部と外部との両方にわたるものでなければならぬけれども、そのような経験は、世界の外部についてはおよそ空虚であり、「したがって可能ではない」。(以上「第一章」)

「世界の果て」は、時間と空間の枠組み(感性)において認識・経験する私たちには知り得ないものである。それは私たちの認識を超えている。「カント」では、我々の認識を超えるものとして、崇高なものや「物自体」の他に神が挙げられている。以下は『カント』からの引用である。

世界とは「現象の総括」であり、現象の総括としての世界は、空間と時間という形式とともに、経験的な遡源のそのつど拓かれてくることを、この本の第一章ですでに確認しておいた。そうであるとすれば、神はそうした世界のうちに宿らない。神の存在のかたちから時空という形式を排除すべきであるかぎり、神は世界のうちに場所をもたず時点をもたない。神は世界を超越しているこ

とになる。(略)

(略)世界の原因として(世界の始まり)である「神」は、それじたい世界の外部をかたちづくる。神という名の世界の始まりを、「根拠」という始まりを、世界の内部で問うことはできない。

世界の境界と経験の限界はそのつど、おおいあう。経験の境界は、そのたびごとに世界の限界である。神はそして、境界においてとらえられた世界の、さらにそのそこにある。空間的ではないあなたに、時空にかぎられた世界の、非空間的なあなたにあることになる。

(以上「第二章」)

崇高なものや神といった、人の認識・理性を超える不可知のものについては、言葉は意味を失わざるを得ない。それらは証明不可能だからだ。本作には満開の桜の森の下について、次のような一節がある。

(略)花の下の冷めたさは涯のない四方からどつと押し寄せてきました。彼の身体は忽ちその風に吹きさらされて透明になり、四方の風はゴウゴウと吹き通り、すでに風

だけがはりつめてゐるのでした。彼の声のみが呼びました。彼は走りました。何といふ虚空でせう。彼は泣き、祈り、もがき、たゞ逃げ去らうとしてゐました。そして、花の下をぬけだしたことが分つたとき、夢の中から我にかへつた同じ気持を見出しました。

桜の森の下、「彼の声のみが呼びました」とある。これは、言葉になるかならないかの境目にいることを意味していよう。世界の内と外のはざままで、虚空としか言いようのない世界の外を垣間見てしまった恐怖。言葉が意味を失う世界の外部を経験してしまった者が、世界の内部（人間世界）にとどまるべく、言葉に助けを求めているのではないだろうか。

すでに引用したが、本作の最後の方に「桜の森の満開の下の秘密は誰にも今も分りません。」とある。答えない問い（「秘密」）について、『カント』には次のような一節がある。

問いは不在の深淵にたいしてむけられる。深淵とはまさに峡谷のあいまにふかく抉られた裂け目、底しれない無の淵のことである。（略）谷間をなす深淵は、たんなる空虚である。そこに答えはなく、問いだけがいたずらにこだまする。理性の深淵のなかで、答えない問いかけ

が、ひとり反響している。けれどもそのことこそが、すがたをあらわすことがなく、世界のうちでかたどられることがないもの、最高存在が不在のままにあらわれるかたちであり、この世界における神の痕跡なのである。

答えがなく問いだけがこだまする理性の深淵・空虚こそは、最高存在（神・理念）の痕跡であるという。答えない問いのこだまとは「秘密」と同義である。繰り返すが、桜の森の下の経験とは、認識可能なものと不可知のものとを分ける境界線上の経験を、理性の深淵への答えなき問いかけを意味している。

本作の山賊は、山に住むようになって何度か桜の満開の下に行っている。その都度理性の危機に瀕して逃げ帰っている。小説の最後、彼は逃げることなく満開の桜の下にとどまる。これまでと違う点は、連れの女が鬼になったことだ。小説の最初の方の語りから明らかだが、二人連れであっても、二人とも一目散に花の下から逃げれば、片方が鬼になることはない。

鬼という人ならざる存在への変化は、境界線を踏み越えて、不可知の世界へと出てしまったことを意味しているのではあるまいか。人間が本来存在し得ない世界の外部では、言葉は

意味をなさない。言葉が意味を失う以上、狂気を通り越して「思念」が「とま」ってしまうのも当然ではなからうか。シュールレアリズムが狂気を文学に取り入れたように、狂気はまだ人間世界（言葉）にからうじてどどまっている。

思念＝言葉が消えてしまうと、人は自らを他人や世界と関係あるものとは実感できなくなってしまう。それは他の一切から切り離されている、「白痴」の女の「孤独」を思わせる。小説の最後、山賊は女の顔に手を伸ばす。しかし、他とのつながりを失った彼は女に触れることはできない。そして前述のように人間は世界の外部に存在することはできない。女と山賊の姿がかき消えてしまうのは、そのためではあるまいか。『カント』には人間の理性について、次のように述べられている。

神の理念、より限定していえば純粹理性の「理想」は、
とはいえ、意義をもたないものではない。（時間や空間など
の——河内注）いつさいの条件をはずれた存在、端的に無
条件な存在は、条件の系列をそのはまで歩みぬこうと
する理性が、むしろ必然的に追いもとめてやまないもの
である。

けれども、その存在を「証明」することは不可能であ

る。最高存在については、証明が不可能であることこそが、重大な意味をもつ。ひとの思考はそのままで宙づりとなり、理性が立ちすくむ。理性が立ちすくんで驚異にうたれる存在こそが、最高存在の名にあたいするはずである。

（第二章）

人間の理性の深淵には不可知のもの＝「理想」が潜んでいる。自らの限界まで歩まんとする理性は、その証明不可能なもの・沈黙する他ないものを追い求めずにはいられない。理性が自らの限界を目指すのをやめた時、人は満開の桜の下で「陽気に」酒を飲むことができるのであろう。

本作は理性の限界、不可知の領域にあたう限り近付いた人間を描いた小説と言える。小説「白痴」では、言葉によって人は他人や世界とつながり、つながってこそ人間だというメッセージがくみ取れる。言葉を求め、世界とのつながりを求めるのが人間である。だが、本作から読み取れるのは、言葉が吸い込まれて消えてしまう理性の深淵、あらゆるものから切り離されてしまう地点を目指すのもまた人間だ、ということだ。本作は、「文学のふるさと」（『現代文学』昭和十六年七月）と絡めて坂口安吾の文学観などの観点から論じられることが多いが、安吾作品における人間観を考える上でも重要なもの

と言えよう。

注

注1 以下、「桜の森の満開の下」本文の引用は『坂口安吾全集 05』（平成十年六月 筑摩書房）による。なお、本稿における引用文中の傍線は全て筆者による。

注2 女の首遊びが醜いものであることは、顔の形が崩れるほど女が喜ぶことから明らかである。女が山賊の女房のうち、綺麗な者から殺させ、最も醜い女だけを残す、つまり、殺させる最も美しい女と最も醜い女が残ることも、後述する美醜というテーマと関係している。

注3 シリーズ・哲学のエッセンス、第八刷、平成二十年十一月、NHK出版。ついでに述べておくと、坂口安吾「ぐうたら戦記」〔『文化展望』昭和二十二年一月〕では、カントの『純粹理性批判』について述べられている。

注4 『現代文学史研究 第二十三集』（平成二十七年十二月）。

注5 河内重雄「坂口安吾「白痴」論——言葉への意識を出発点に」〔『語文研究』平成二十六年十二月〕。

注6 以下、「白痴」本文の引用は『坂口安吾全集 04』（平成十年五月 筑摩書房）による。

注7 平成二十四年八月、講談社。

注8 言葉の共同性については、『ことばへの道』に次のような一節がある。

人間とは、ことばを交すことができるとともに、ことばを交さざるをえない存在だ。できるという事実によって、人間は普遍

的かつ象徴的な共同性に参与するし、これを維持し発展させる資格を獲得するし、せざるをえないという事実によって、そういう共同性とのかわりを不断に強制される。(略) ことばを交すことが、すなわち、ことばの共同性のうちに生きることであり、ことばの共同性を強制されることでもあるのは、ことばが共同存在としての人間の本性に根ざすことをあらわしている。

(こうち しげお・北九州市立大学文学部准教授)